

Title	シャーウッド・アンダソンの処女作：『ワインズバーク オハイオ』への道
Author(s)	森岡, 裕一
Citation	Osaka Literary Review. 18 P.113-P.125
Issue Date	1979-12-10
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25690">https://doi.org/10.18910/25690</a>
DOI	10.18910/25690
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# シャーウッド・アンダソンの処女作

——『ワインズバーグ オハイオ』への道——

森 岡 裕 一

シャーウッド・アンダソンの処女作『ウィンディ・マクファソンの息子』(1916)<sup>1)</sup> について一篇の論文を書くなどという試みは、いささか滑稽なごとのように思われるかもしれない。

この小説は、なによりアンダソン自身が「未熟」だと認めているし、出版当初から「不器用な文体」が云々され、作者の意に反して修正が施されねばならなかったいわくつきの作品である。とりわけ後半部の冗漫な作品構成に関しては、アンダソンに好意的な評者すら非難を隠そうとしない。

にもかかわらず、私がここでこの小説を取りあげようとするのは、一部の論者のようにこの小説の前半部のみを切り離して評価したり、あるいは主人公サム悲劇を「ギリシャ悲劇のパタン」などという、あまりに普遍的なテーマに短絡的に結びつけることでは満足しきれないからだ。<sup>2)</sup>

私としては、この小説を全体としてとらえ、舞台背景となっている19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカの状況に置き直して読むことで、アンダソンのいわばアメリカ性を明らかにしたいと思う。<sup>3)</sup> もちろん、この小説が文学的に取るに足らないものであることは疑う余地もないだろう。しかし、文学的価値の有無は別にして、アンダソンの他の秀作、たとえば『ワインズバーグ・オハイオ』(1919)のテーマがこの小説でより明瞭に表現されていることが明らかになるなら、この小説を分析することにそれなりの意義を認めてよいのではないか。つまりはアンダソンの成功作の奥行の深さ、文学的洗練度をよりよく理解するための一つのパースペクティブを設定する試みとして、『ウィンディ・マクファソンの息子』を検討してみたいと思うのだ。

さて、この小説はサム・マクファソンという、中西部の田舎町キャクストンの若者が、シカゴへ出て次々と物質的成功をおさめるが結局幸福が得られず、すべてを投げうって「真理」探求の旅に出かけ、ついには夢破れて悲しみのうちに妻のもとへ帰還するという物語である。

筋書きだけから言うと、この小説はいわゆる「成功物語」の基本パターンを踏まえ、「成功の夢」とその挫折を扱った小説であって、すでに四年前の1912年ドライサーの『財界人』が出版されていることからみても、別段の獨創性を主張しうる小説とは言えないだろう。

がしかし、ここで扱われている題材が、当時のアメリカの作家たちが好んで取りあげた題材であるだけ一層、この小説の分析を通じて、アンダソン独自の現実認識のあり方が明瞭に窺えるのではないだろうか。

ともあれ、その点を頭において、私たちはサム・マクファソンの「成功」と「挫折」を検討していかねばならない。

アンダソンは冒頭の二つの章で、わざわざ時間の流れを逆にして、新聞売りの仕事に精を出すサムの若々しい姿と、南北戦争当時の古き良き時代にのみ眼を向けた人生落伍者としての父親ウィンディを、際だったコントラストで描いている。いわば「未来」と「過去」の対比という、アンダソン好みの対位法がすでに冒頭で設定されたことになるのだが、同時にそれは、この小説中の言葉で言い換えると、現実 (facts) と夢 (dream) の対立とも言えるだろう。そしてこの親子の対比は時間の経過につれて一層極端なものになっていく。

ところが、その極端さが異常味すら帯びてくるのは、彼らの住むキャクストンの町が、逆にきわめて牧歌的で調和のとれた世界として描かれているからに他ならない。

キャクストンの町は、「無慈悲な自然の進入から身を守るべく人々が野に準備した、並び立つとうもろこしの隊列」によって保護された町として描かれる。自然の恩恵（とうもろこし）に浴しながら、自然の不都合な面（荒野）からは切り離された、牧歌的としか形容のしようがない世界。そ

の住人たちはと言えば、毎年のとうもろこしの収穫について語る一方、シカゴに出て産業社会の荒波にもまれようとするサムに対し、「彼を前に押しやるのが、将来の発展 (future greatness) のために、われわれ町の者が負うべき義務ではないだろうか」と考える人々なのだ。

したがって、他の売子と競争で新聞を売って稼ぎまくるサムの行為も、彼らにとっては「夕べの娯楽」以外の何物でもなく、自殺者まで出す後のサムの住む世界とは大きく隔たっている。そういえば、冒頭のシーンの舞台は鉄道の駅であり、アメリカ文学で殆ど文明の代名詞としてしばしば否定的ニュアンスを伴って使われる鉄道が、ここでは「夕べの気晴らし」を人々に提供している。

「熊」でのフォークナーの言葉を借りるなら、まさしく「かつては害がなかったのだ」<sup>4)</sup>

そうした温和な環境にあって、サムの姿が異彩を放つのは、いわば当然の成り行きだろう。サムは、自分が他の人々とは違った素材 (stuff) で作られており、「新しい人間」になるべき存在であると思込む。

そして、秩序と体系に対して「痛ましいまでの欲求」をもつ一方では、神や性に対する衝動をひたすら押し殺し、金儲けに没頭するのだ。このようなサムの平板さ、一面性はサムとその友人であり精神的指導者のテルファ、そしてかつての教師であったメアリーとの交渉を検討することで、一層明らかとなるに違いない。

表面的には、テルファとメアリーが、サムに対してそれぞれ対立する価値観を教える存在のように見える。テルファは、サムが「ドルの世界の大物 (big man of dollars)」となることを予言し、彼に「他人のことは一切考慮せず」わが道を進めとまで言い切る人物であり、他方、メアリーは本の世界に住む人間として、サムに「心の領域の問題 (things of the mind)」に目を向けよと説く。さきほどの図式に従うなら、「現実」と「夢」との対立がここでも見出されうると言ってよいだろう。

だが、意外なことに二人の間には、一つの考えに固執する極端な性癖と

いう意味での共通点があることを忘れてはならない。

テルファーは元画家志望の「伊達男」で、今は自称「生の芸術 (art of living)」の実践家だが、その彼がサムに徹底した金儲けを奨励するのは、すべての芸術家は「完全さ」を求めるという自説を適用したために他ならない。

そんな彼がキャクストンの住民たちの眼に「異常な人物」として映り、彼の存在が「自然の法則を侵犯しているように思われる」のも無理はなかった。

同様のことがメアリーについても言える。

この「どこか尋常でない」女教師は、「非現実的な幻想の世界」に住み、「町の生活に加わることなく」、いかなることがあっても自分の生き方を固守しようとする人物であるのだ。

彼らがアンダソン流の「グロテスク」な人物であることは、あらためて指摘するまでもないだろう。だが、彼らをキャクストンの平均的人物像の中に置いて眺めた時、そのグロテスクな極端さは、反面彼らの純粋さの表われとも言える。牧歌的なキャクストンの町が、「現実」と「夢」を、矛盾を意識することなく調和せしめた世界であるとするなら、彼らの極端さはそのような楽観性の裏にひそむ対立的要素が、純粋な形をとって現われたものと考えべきだろう。

ともあれ、サムはこの二人から大きな影響を受ける。図式的にまとめるなら、サムはテルファの「現実」信奉をもってビジネスの社会を突き進む一方、心の奥底にメアリー的「夢」の世界を温存することで実生活を生きぬこうとするのだ。こうみえてくると、サムという存在が、実はそのままキャクストンの町の姿に重ね合わされていることがわかる。サムが「ある意味で自分がキャクストンの町の子であると感じた」のも当然と言ってよいだろう。

しかし、テルファにせよメアリーにせよ、彼らは変わり者でありこそすれ、キャクストンの町を脅かす存在とはなりえなかった。

調和的世界の崩壊が芽生えるのは、サムが本来矛盾する要素を内に秘めた牧歌的世界を意識的に極端な形で生き始めた時である。

サムがそれまでの新聞売りの職をやめ、農産物仲介人として実業家の世界へ一歩足を踏み入れた時「ロマンスは終わった」と叫ぶテルファの言葉の中に、「芸術家」としての彼一流の予言の声を聞き取るのは、思い過ごと非難されるだろうか。

ところで、アンダソンの他の多くの小説がそうであるように、この小説も作者自身の人生をモデルにした要素が色濃いものであることは否定できない。

だが、主人公サムの物語をたんに一人物の個人史としてのみ限定して読むことは、果たして妥当だろうか。その問いに答えるために私たちは、サムがシカゴへと旅立つにいたる状況をもう少し検討してみる必要がある。サムが金儲けに没頭することになる直接の動機は、あくまで、父親ウィンディの醜態とそれをあざ笑うキャクストンの人々に対する反発であるのだが、彼にとっての金儲け、すなわち物質的満足を得ることは、同時に、幸福を得るための「論理的解決策」であったことを忘れてはならない。彼は会話のないみじめで貧しいわが家の食事に比べ、友人の家で目の当りにした笑いの絶えない食卓の楽しさと豊かさに、「豊かであることと、それに付随する快適さがどういうものであるかを知る」のだ。つまり、彼にとっての金儲けは、彼なりの幸福の追求手段であったわけである。

と同時に、サムがビジネスの世界へ飛び込むことで、自由な生活を送りたいという彼の願望を満たそうとしたことも無視することはできない。彼はメアリーに対し、「学校の先生たちにはあきあきした。ぼくは学校から外へ出て、自分自身で街へ出てみたかったのだ」と述べる。

結局のところ、彼の人生は「自由」と「幸福の追求」に捧げられていたと考えられるのだ。

ところが、この二つが、「生命」とともにアメリカの独立宣言における「奪い難い天与の権利」であったことを思うと、サムの人生はそのままメリ

カ人一般の人生をもさし示していると考えてよいのではないか。少なくともそう考えることで、「サム物語は一人の人間の物語であることをやめて、一つのタイプの物語になる」というアンダソンの言葉が、よりよく理解できるのではないだろうか。

そんな彼が、実業家の道に自らの生きがいを見出そうとしたことは、十分注目に値する。

当時のアメリカが、産業化・都市化の波にみまわれた「進歩主義」の時代であったことは、今さららしく指摘するまでもないだろう。

あるいは1869年のアメリカ初の大陸横断鉄道が、他ならぬシカゴを起点としていたことをここで思い出してもいい。

後の大統領クーリッジの「アメリカのビジネスはビジネスである」という言葉がかりに正しいとするなら、サム・マクファソンこそ典型的なアメリカ人を代表する人物と考えることができるのだ。

こうみえてくると、サムの悲劇がそのまま「アメリカの悲劇」でもあることは、今や明白だと言えよう。

多くの優れたアメリカ研究家が指摘するごとく、アメリカ文化の「矛盾」が、「明白なる使命」と「牧歌的理想」の対立に根ざすものなら、その「矛盾」はこの小説の中で、サム個人の「進歩」へのあこがれと、少年時代を過ごしたキャクストンの豊かな自然に恵まれた調和的世界への回帰願望との間の葛藤となって作品化されている。

アメリカ史において、「矛盾」がいよいよ表面化しだすのは、「安全弁」たるフロンティアの消滅宣言の出された19世紀末であったように、サムの内なる「矛盾」が問題化し始めるのは、彼がシカゴの実業家として「完全さ」の追求に乗り出した瞬間に求められるべきだろう。その意味で、サムのシカゴへの脱出直前、「鉄道が彼にとって新しい意味を持ち始めた。というのも、いつか彼がそのような列車に乗って新しい生活へとび込んでいく日がやってくるであろうから」という文章は、きわめて暗示的だと言える。あるいはまた、しばらくぶりにサムの姿を見た際に彼の友人が漏らす「一

体サムはどうしたんだろう。すっかり人が変わってしまった」という言葉の中に、調和的世界の崩壊を無意識に嗅ぎ取ったキャクストンの住民の驚きの声を聞くことができるのではないだろうか。

さて、第2部(Book II)以降シカゴでのサムのお話は、彼の「矛盾」が破局へと収斂していく過程を克明に描いた物語と言える。

ここでのアンダソンが、「進歩」「効率」「倍增」「革新」「計画」といった言葉をふんだんに使うことで、限りなくふくれあがるサムの野望を描くと共に、充実期を迎えた国家としてのアメリカのエゴの実態を書き込もうとしたことは、おそらくまちがいないと言ってよいだろう。

サムは、ビジネスを「偉大なゲーム」とみなし、失敗者を「戦いに勝って賞金を獲得した競技者」の眼で冷ややかに眺める態度に出る。彼の野心は、自分が職を得た工場全体をきり回すことから、「この町とこの国の大物たち(big men)の中に自分を置く」ことへ膨れあがり、ついには自らを運命の「創出者であり支配者」であると思いつまみ込んでいた。

まさに、「彼にとってできないことは何ひとつないように思われた」のだ。

この時期のサムを形容するに最もふさわしい言葉は「高慢」という言葉であるに違いない。

だが、この高慢さは同時に何とナイーブなものであることか。「完全さの感覚」を身に覚えたとするサムの姿に、私たちはいまだ成熟しきれない男の姿を読み取ることができるのだ。

かつてサムは、病死した母親に代わる存在を欲するあまり、親子ほど歳の違うメアリーに一方的な求婚をしたことがあった。

その時の彼の動機が、彼女との結婚が「幸福につながり」そうすることで自分は「夢を持たない蓄財家(money maker)」としての仕事に専念できる、というものであったことをここで思い出す必要があるだろう。

あるいはまた、後に彼が自分の勤める会社の所有者の娘と結婚し、ある時期「ほとんど理想的な幸福に常に触れた」と思いつまみ込んでいたことも指摘



しておかねばならない。

しかし、すでに述べたように、サムを持つこの疑うことを知らない楽天性は、アメリカという広やかな文化的コンテクストに置いて考察する時、その持つ意味がより明確に理解されると考えられる。

アンダソンは、サムが会社内で「大規模な変革 (big changes) を強制した」と書いているが、この小説の舞台背景となっている19世紀末から20世紀初頭が、「完全さ」を追求してきたアメリカの歴史の中でも最も「進歩主義」的で、同時に「改革の時代」であったことを考えあわせる必要があるだろう。そしてまた、「大規模な変革」こそ、20世紀前半の「変貌するアメリカ」を描いたF・アレンの著書の題名であったことを思い浮かべてもよい。<sup>5)</sup>

いや、なによりもアンダソン自身の次のような言葉を、私たちはたんなる無意味な発言として片づけるわけにはいかないのだ。

「彼ら〔＝大都市の実業家〕は、巨大産業組織や鉄道網を、まるで興奮した子供のように弄んだのだった。」

ところで、このように「現実」の支配する「成功物語」の陰に、もう一つのイメージの系列、すなわち「牧歌的理想」に対する願望がサムの心の中に存在する事実、再び私たちの眼を向ける必要があるだろう。

シカゴでの一年目、サムは同郷人パーグリーン一家のもとに世話になるのだが、そのパーグリーン一家というのが「実際、異国の土の上にあった」と書かれ、シカゴの喧噪の中に暮らしながら、いまだ「とうもろこしと雄子牛の地」に心を傾け、一家の主人の仕事が「あの楽園 (that paradise)」であるキャクストンで見つかればよいと願っていた事実を、たんなる背景描写としてすますわけにはいかない。あるいは、飽くなき事業欲に身を委ねる一方、「サムは、それとは知らずして、彼の人生の真の闘いの一つを戦っていたのだ。その闘いは、ベッドから抜け出て雪化粧された空を眺めているような彼の性質にとっては大層分が悪かった」という文章に、サムの心の奥底に秘められた願望を読み取る必要がどうしてもあるのだ。

しかし、この時点でのサムの「矛盾」は十分意識されたものとはなっていない。

いわば、「昼」の世界と「夜」の世界の巧妙な使い分けがなされているのだが、そのことをより明らかにするために、サムの前に続いて姿を現わすジャネットと、後に彼の妻となるスーと彼との関係を考えておきたい。

ジャネットはメアリーと同じく「夢」の世界を代表する人物であり、サムとの愛の成就を待たずに死んでしまう女性だが、それでも「彼の心に、後に人生をより広い視野をもって眺めることを可能にする何かを目覚めさせた」のであった。同じことはスーについてもあてはまる。サムとの恋愛を通して「彼女の中の何かを彼をとらえた。——それはジャネットの中にもあった何かだった」とアンダソンは書いている。

スーの強い影響で、一時の間サムはビジネスの世界を放棄する。二人はミシガン湖へ新婚旅行に出かけるが、それはサムにとって自然の洗礼を受け直し、忘れかけていた世界の存在を確認する過程であったと言ってよいだろう。六週間彼らの過ごした場所は「なかば野性の地 (half wild land)」であって、サムはそこで「幸福な自由 (happy freedom)」にとまどいさえ覚えながら「新しい種類の人々」を発見し、そして「ボートをこいだり狩りをしたり、そうした人生のすばらしい味わいを彼自身の生存の中へ取り入れるようになった再調整 (readjustment) と自由」の時間を心ゆくまで味わうのであった。

ところが、「再調整」を経たはずのサムが、シカゴへ帰るや否や再び「機械的進歩」へ一層の熱意をもって取り組むのだ。

つまり、自然に抱かれ「仕事の上で彼が計画した大それたことから (big thing)」など「とんでもないナンセンスでむなしいことだ」と思うサムと止どまることなく進歩をめざすサムは、一人の人間の中に全く融和されることなく同居しているのである。

だが、このような平板さ、単純さはサムを取り巻く人々についても言えることであって、ここではジャネットとスーに注目したい。

彼女たちは、サムに物質主義とは正反対の「夢」の世界の価値を教える重要な存在だが、その行為は必ずしも常に美しく描かれてはいない。たとえばジャネットは、自分の考えに熱中するあまり「彼女の小さなはりつめた顔はゆがんでくる (transfigure)」のであったし、スーにしても、生まれてくる子供に未来を託す情熱とは裏腹に、妊娠時に醜いまでのヒステリックな態度を示していたことを思い出す必要がある。

いや、それよりもはるかに重要なことを見落としてはならないだろう。それは、アンダソンがこの二人をともに 'deformation' のイメージで描写していることである。

ジャネットは文字どおり 'cripple' であったし、スーについても次のような表現がなされている。ある夜夢の中でサムは「彼女が盲目になり光のない眼で部屋の中にすわって、まるで気がふれたようになりくり返しくり返し、『真実、真実、私の眼が見えるように真実を返してちょうだい』とやっているように思った」のであった。

この部分は、彼女たちの純粹であらんがための極端さ、あまりにゆとりのない精神の限界がきわめて象徴的に表現されていると考えられるのだが、それは同時に、矢印の向きを逆にしたサムの単純さ、未熟さへの警鐘でもあり、さらにはアメリカ的なエゴに対する「否」の表現ではないだろうか。

サムの信奉する価値が「進歩」「力」「支配」であるとするなら、'deform' された人間の形象こそ、「景観の中へ突然侵入する機械のイメージ」<sup>6)</sup> と逆方向に共通の働きを持ち、しかもより普遍的な広がりを持つイメージだと考えられるのだ。

この小説において、くり返し現われる 'deformation' と「死」のイメージが、サムの住む一見かげりのない平板な世界に暗い影を投げかけている。<sup>7)</sup>

こうみえてくると、この小説は一般に思われている以上に『ワインズバーグ』に近い小説であるうえに、三年後のアンダソンが「グロテスク」イメージを駆使して描きあげる物語の「序文」として読まれうると言うことができるだろう。

ともあれ、次第に高まりつつある悲劇的トーンの頂点にサム・ワイルドの破局が書きこまれることになる。あれもこれもと欲張った彼の野心が無残に打ち碎かれ、それを境に彼はすべてを捨てて「真理」追求の旅に出かけるのだ。

「アメリカの夢を実現した」はずのサムが今までとは違って変わった謙虚さで「熱心に教えを求めて」各地を放浪し、主義や理念で動くことのない人々の真の姿を学んでいく。

そして、人々の生活が観念的に理解するには「あまりに複雑である」ことを知ったサムは、再び自然の懷に抱かれる経験を経るが、かつてのサムとは違い「自然により近い生活」で我を忘れることもなく、時々行動を共にする放浪者たち (vagabonds) の中に何か不潔で責任を回避する姿勢すら嗅ぎ取るのだ。

図式的に言うなら、この部分は、「機械」「現実」「都市」「昼」の世界と「庭園」「夢」「農村」「夜」の世界とが、安易に両立するものでも単純に二者択一的なものでもなく、両者の間で絶えまなく引き裂かれながら、苦悩しつつ謙虚に生き続けなければならない人間の宿命を、サムが少しずつ学んでいく過程を描いた部分とも言えよう。

と同時に、彼が「大きくて清潔で新しい大地」に生まれたはずのアメリカ人が、結局「旧世界」同様汚れた存在であることを悟る事実、アメリカ的楽観性に対するアンダソンの疑いの声を聞きとるべきではないだろうか。

アンダソンはかつて、ドライサーに書き送った書簡の中で『アメリカの悲劇』の上演脚本にふれ、個人の罪は許されうが社会の罪は許されえないとする結末に反発し、「もしアメリカに裏切り (betrayal) があるなら、それは私たちがお互いに裏切りあう結果である」と述べた。<sup>8)</sup>

そのアンダソンがサムに与えた結末は、ふとしたことで知りあった女性の三人の子供を養子にして、彼らの期待をになうべき子供を無事出産することのできない妻のもとへ連れ帰るという筋書きである。

自らの高慢さを知り謙虚に生きることの重要性を悟ったという意味で、

結末部でのサムが私たちのみてきたサムとはすっかり変わった人物として表わされていることはまちがいない。だがはたしてこれが、サムにとっての「解決策」でありえただろうか。

1922年の改訂版の結末は、家の前の茂みにいたサムが、前後の「闇」の「壁」を押しわけて「光」の中へ出ようと、片手を前にさし出して茂みを出した後、「よろけるように」階段をかけあがる描写で終わっている。

「養子」という、いわば「機械仕掛けの神」を登場させることで一応の解決をつけなければならなかったアンダソンの甘さは否定できないし、しばしば指摘されるように、アンダソンの作品の結末は多くの場合曖昧である。

だが、人生の真相が楽観と悲観の交錯する世界であるのなら、その意味での曖昧さは、名誉でありこそすれ非難される理由とはならないだろう。アンダソン自身、その数頁前のところで、「おそらく彼の物語と人生は帰郷と共に終わったのだろう。あるいは、その時始まったと言うべきか」と述べている。

サム・マクファソンの、そしてシャーウッド・アンダソンの、人間存在の宿命に対するこの認識こそ、かつてフォークナーをして、「彼は書くということに、謙虚さと殆ど宗教的で卑屈なまでの信念と忍耐、そして自らを喜んで投げ出す姿勢をもって臨んだ」と語らしめた特質であると言ってよい。<sup>9)</sup>

そして、この点を『ウインディ・マクファソンの息子』に確認することによって、私たちの歩みも、ようやく『ワインズバーグ』の町の入口へさしかかったと言ってよいだろう。

(注)

- 1) テキストは *Windy Mcpherson's Son* (The University of Chicago Press, 1965) 引用文は拙訳により、小論中のすべての傍点は私のつけたものである。なお、アンダソンの愛読者にとっては、引用部分は明白であると思われるので、繁雑を避けるため、引用頁を示すことは一切省略した。

- 2) Cf. Irving Howe, *Sherwood Anderson* (Stanford University Press, 1966), pp. 76-80; William A. Sutton, *The Road to Winesburg* (The Scarecrow Press, 1972), pp. 350-365
- 3) この立場と方法論については Leo Marx, *The Machine in the Garden* (1964; rpt Oxford University Press, 1978) ; Leo Marx, “Pastoral Ideals and City Troubles”, *The Quality of Man’s Environment* (Smithsonian Institution Press, 1968), pp. 119-144 を参照。なお日本人研究者による同じ立場からのほぼ同時期の作品の優れた分析については、大井浩二『アメリカ自然主義文学論』(研究社 1973) を参照。小論もこの本に負うところが多い。
- 4) William Faulkner, *Go Down, Moses* (Random House, 1942) p. 319
- 5) Frederic L. Allen, *The Big Change: America Transforms Itself 1900-1950*, (Harper & Row, 1952)  
(邦訳『アメリカ社会の変貌』河村訳 光和堂1966)
- 6) Leo Marx, *The Machine in the Garden*, p. 343
- 7) この小説中では、サム之母親、ジャネット、メアリー、レイミー大佐(スーの父親)、サムの赤ん坊が実際に死に、ウィンディはサムの頭の中で一度は死んだ存在となる。
- 8) *The Portable Sherwood Anderson*, ed. Horace Gregory (The Viking Press, 1972), p. 476
- 9) William Faulkner, “Sherwood Anderson; An Appreciation,” *The Achievement of Sherwood Anderson*, ed. Ray Lewis White, p. 197